

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 198 回 懐かしくもあり、羨ましくもあり...縦社会

2007.4.22

春爛漫の昨今、至る所で初々しい「新入社員」を見ることが出来る。彼らの将来、大丈夫かな??なんて、お節介もいいところだが、ちょっと心配になる若者が、何と沢山いることか、一人密かに嘆いている。

明らかに違うところは、「縦社会」の経験のある人とない人の「差」である。縦社会の代表は軍隊やヤクザの社会(?)でも、こんなもの手本にする訳にいかん。精々部活やサークルで「運動」(スポーツよりは泥臭いイメージ)を経験した「体育部系」かどうか...ということであろう(もちろん、精神構造が...という意味である)。

彼らの第一条件は、何を言われても「イエッサー」から始まることに慣れていているところにある。決して口答えせず、言い訳せずに断らない、まず無条件のインプットである。

インプットしてから、考える、「イエッサー・バット」の、例えばこんな話である。
...嘶家の世界は歴然とした縦社会、新弟子から見習い、前座、二つ目と格が上がり最終は師匠と呼ばれる「真打」が最高位、ここまで10~15年かかるといわれている。やっとの思いで晴れて真打、これで俺も一人前。帰ろうとしたら奥から長老の「大看板」に「ちょっと、師匠」と声かけられた。お祝いの一言を戴けると踵を返すと「よっ師匠、その下駄とってくれ」.....「人の事、何だと思っているんだ!悪いけど、俺も同じ師匠になったんだ」とは、口が裂けても言えないのがこの社会である。無条件に「イエッサー」である。
...華々しいテレビの世界、カメラの周りを、目まぐるしく走り回っている若い連中がいる。知らない人から見ると「アシスタント・ディレクター」(AD)なんて、カッコいいなあ...と思いつつ、あの小間使いの、走り回っている連中が、正にADである。「ちょっと、そのADさん、タバコ買ってきてよ!早くしてね」と、俗に言う大物女優に頼んで使われ、プライベートの世話までさせられて、「もう、あったまきた!私はあなたのこづかいさんか!!」...と、怒りまくるADは一人もいない。朝は誰よりも早く来て、怒鳴られることから仕事が始まり、夜は一番遅く帰っていくADは、それでも縦社会の中で、「なにくそ!なにくそ!」といいながら、一歩ずつ、階段を登り続けていく。

業種、業態によって、もちろん話は違う。しかし、何を言われても「イエッサー」とめげずに向かっていく若者を見ると、おじさんは、大いに応援したくなってくる。人の話をろくに聞かず、最初に否定と弁解からしゃべりだす若者を、嫌というほど見てきた。実行もせず口ばかりのタイプの「頭でっかち」は、運動部の社会では全く通らない。せめて「運動」という、縦社会体験者の価値観が、大手を振ってまかり通る世の中が、懐かしくもあり、羨ましくもあり...おじさんも、ずいぶん歳をとったようである。